懐かしさの向こう側へ

作家・編集者 友田とん（ともだ）



来る2027年は小説『百年の孤独』で知られるノーベル文学賞作家のガルシア＝マルケスの生誕100年である。『百年の孤独』はコロンビア奥地の土地を開拓し、マコンドと名付けた村を都市へと発展させ、やがて衰退して消滅させてしまう一族を描いた小説だ。私はかつて4年もかけて『百年の孤独』を読んでいない人の「代わりに読む」という奇妙なことを試みた。それは要約や解説ではなかった。読み進めながら思い浮かぶテレビドラマや映画やドリフターズのコントなど一見関係のない物事に次々と脱線していく思考の過程を書き綴ったものだ。小説を読む間に心に湧き起こる好奇心や驚きをそのまま感じてもらいたかったのである。私家版としてまとめた『『百年の孤独』を代わりに読む』は、幸いにも2024年にハヤカワ文庫の仲間入りすることになった。

なぜ私は4年もかけて試みたのか。それは『百年の孤独』の魅力に取り憑かれていたからだ。マコンドでは、あり得ないことが次々と起こる。喉を突き刺して殺した決闘相手が夜ごと水を求めて庭をさまよい歩き、またある時はホットチョコレートを飲み干した神父が12センチ宙に浮いて人々に喜捨を求める。そんな事態に、人々はいちいち応対する。それが面白かったのだ。しかも、あり得ないことの連続なのに、自分たちの家族や先祖にもこんなことが起きていたのではないかと懐かしさを感じさせるものがあったのである。むろん、懐かしさを感じた人は私だけではなかっただろう。異国の者にも故郷を思い出させる土着の暮らしが世界中に散らばってあり、またその暮らしに近代化の波が押し寄せて消えていったのだ。そうした同時代性をガルシア＝マルケスは描いて見せたのである。それでも、私は懐かしさの理由はそれだけでないような気がしていたのだ。とはいえ、それればかりを考えているわけにもいかない。

この数年、私は地下鉄の漏水対策をフィールドワークしていた。それは地下鉄の駅構内で見かける天井から漏れ出した水をビニールシートやチューブで集める応急処置である。小説を読むことから一転、今度は地下鉄の漏水対策だ。日々地下鉄を利用していて、とにかく気になって仕方がなかった。漏水を根本的に解決するのではなく、その場その場で対応していくところに面白さを感じたのだ。と書けば、どこかで『百年の孤独』の世界と通じているような気もする。こうした人が手当することでどうにか維持されている手に負えないもの、これをいわば「インフラ」ととらえ、それに魅力を感じてきたのだ。それをまとめた『「手に負えない」を編みなおす』では、地下鉄の漏水対策を皮切りに、幹線道路整備や公園の改修工事、はては言葉や記憶までも手当てすることで維持されているインフラと捉え、それらとの付き合い方を探究したのだった。



地下鉄神保町駅の天井に、しめ縄のようにチューブが吊るされている（『「手に負えない」を編みなおす』より）

今、私は小説を書いている。そんな折、ガルシア＝マルケスの別の小説を読み返していて、あることを見つけた。それは、舞台となる内陸の港町に海岸近くの町から物資や人や手紙が船で運ばれてくることだった。そこは作家自身が暮らしたバランキージャやカルタヘナをモデルにしているらしかった。もちろん、単に思い出を書いたのではない。様々な要素を組み替えることで架空の町をあえて作りなおし、人々の暮らしを再構築したのだ。感じていた懐かしさはこの内陸の港町によるものだったのではないか。

私は京都市の伏見で育ったのだが、そこは内陸の港町、物流の中継地点だったからだ。かつて大阪から淀川を上ってきた船の荷は伏見で陸揚げされて、都へ陸路で運ばれ、人々の暮らしを支えていた。明治時代に鉄道が開通してからも、戦後のモータリゼーションが進むまでは、水運が活発に利用されていた。だが今、町には港の痕跡が残るばかりである。「浜」はあちこちの地名にだけある。堤防にある閘門（こうもん）は動くことはない。その町が物流インフラとして機能する姿を私は見たことはないのだ。だからこそ、書いている小説の中で町を作りなおし、想像力を働かせていきたいのである。例えば港があったのならば、船大工がいたのではないかと川向こうの町史を開いてみる。そこに思いもよらぬ現在とのつながりを見出す。それは書こうとしなければ見つけられなかったことだ。もはや懐かしんでいるのではない。小説として町を作りなおしていくことをメガネにして、その向こうに現代を見つめようとしているのだ。

略歴
「代わりに読む人」代表。著書に『あるはずの試み』『ナンセンスな問い』（エイチアンドエスカンパニー）、『『百年の孤独』を代わりに読む』（ハヤカワ文庫）、『「手に負えない」を編みなおす』（柏書房）、『先人は遅れてくる』（代わりに読む人）などがある

Essay 時の調べ